江戸のダジャレ旅

八戸で歌川国芳展

▶上◀

木曽街道六十九次 宿駅の名から物語連想

「ダジャレ」と聞くと、おやじギャグと笑われますが、世のおやじ?様方に敬意を表して言うならば、それは知識と教養のもと豊かな発想力によって生み出される言葉遊び。現在、八戸市の八戸クリニック街かどミュージアムで開催している「歌川国芳 江戸のダジャレ旅」は、現在東京でも大きな展覧会が開かれ大人気の奇才・国芳が描くダジャレ満載の浮世絵展です。

国芳は、豪快な3枚組の武者絵や猫を用いた戯画などでも有名ですが、今回は全72図からなる一大シリーズ「木曽街道六十九次」を一斉公開しています。木曽街道は、一般には中山道と呼ばれる五街道の一つで、幕末には皇女和宮の降嫁の際の経路としても知られる、江戸と京都を内陸回りで結ぶ街道です。

では、なぜ「ダジャレ旅」か。通常、街道絵は歌川広重「東海道五十三次」のように各宿駅に当地の風景や旅情を描きます。しかし、国芳は、宿駅の名称から言葉遊びで連想される物語の場面を描いているのです。

例えば、上の激しい炎に包まれる行者の作品は、曲亭馬琴のベストセラー「南総里見八犬伝」の一場面。「忠」の玉を持つ八犬士の一人・犬山道節が火遁の術で身を隠すところですが、「ワラ」に「火」がついているので、現在の埼玉県「蕨」という宿駅にこの場面を描いています。メラメラと幾重にも燃え上がる火と煙の表現も見事な作品。ちなみに、ペンネーム・曲亭馬琴も「くるわでまこと」と読ませ、女性遊びをする廓でも真面目(誠)な性格という意味を含んでいるともいわれます。

このような単純な語呂合わせもある一方、次の作品は、安倍晴明にまつわる葛の葉伝説。安倍保名に妻として尽くし、大切に一子を産み育てた葛の葉。しかし、彼女は昔、和泉国信田の森で保名に命を救われた白狐でした。正体が暴かれると知った葛の葉は、障子に「恋しくば 尋ねきてみよ 和泉なる 信田の森の うらみ葛の葉」(恋しくなれば訪ねて来なさい。和泉国の信田の森で、悲しみに暮れる母親の元を)の歌を我が子に残し、一人寂しく姿を消すのでした。

何かを感じたのか、身を起こし母の裾に手を伸ばす幼い安倍晴明が描かれ、朦朧と消えゆく葛の葉には、嘆き悲しむ狐の姿が透けています。当時「朧画大極上」と評された見事な摺りの作品。宿駅名は「妻籠」で、「妻」が森に「籠る」から現在の長野県「妻籠」にこの場面をあてています。

また、メインのはずの宿場の風景は、左上のコマ絵の中に凝縮され、その輪郭も「妻籠」は葛の葉っぱ、「蕨」では八犬伝から犬にちなみ、雪が降れば犬が喜ぶとされたことから雪紋、右上の赤い題名の周りにはたくさんの〝ぶさかわ〟?な犬も描かれています。ネタが盛りだくさんに詰まっているのも江戸らしい遊び心です。

今回も、当時の雰囲気を感じる摺りと保存の良い作品をそろえています。知的好奇心あふれる江戸庶民と、どんな表現もこなす職人気質の彫師・摺師の存在も想像しながらお楽しみください。

(八戸クリニック街かどミュージアム学芸員・小倉学)

※「歌川国芳 江戸のダジャレ旅」は6月19日まで。問い合わせは同ミュージアム(電話0178㉜7737)へ。

歌川国芳「木曽街道六十九次 蕨」1852年

歌川国芳「木曽街道六十九次 妻籠」1852年